

# ふくやま歎異抄の会通信

令和四年五月

## 前序

竊かに愚案を回らして、粗古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑有ることを思うに、幸いに有縁の知識に依らずば、争でか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ること莫れ。仍って、故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留る所、聊さか之を註す。偏えに同心行者の不審を散ぜんが為なりけりと、云々



## 歎異抄前序

### 仏道

#### 世間道と出世間道

龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』の中に「世間道とは即ち是れ凡夫の行ずる所の道に名づく。凡夫道は究竟じて涅槃に至ること能わず、常に生死を往来す。出世間道とはこの道に因りて三界を出ることを得る、故に出世間道と名づく」とある。

ここで龍樹は人間の歩みを「世間道」と「出世間道」に分けて、それぞれの歩みの本質を述べている。しかし、二つの異なった歩む場があるのではない。歩む場は一つである。この我が人生である。場は一つではあるが、その場を「世間道」として歩むか、「出世間道」として歩むか、そこに決定的な違いがある。片方は流転空過して終わり、片方は究竟じて涅槃に至る。

「世間道」の歩みは、どこまで行っても三界（自己意識に閉鎖された状態）を出ることができず、生死（苦楽・損得・毀誉褒貶）を往来し、ついには空しく生を了えるしかない。

人はこの世に生まれ、「我」という意識をもった時より、世間道を歩みはじめる。それは、生まれ落ちた社会（世間）の価値観の中を生きるということである。価値は目標を生むと同時に必ず優劣、上下、強弱、内外などの差別を生む。子どもは学校に行き、成績で評価され、選別され、就職し、出会い、愛しあい、結婚し、さまざまな業縁

の中で毀譽褒貶に翻弄され、やがて歳老いて、死んでゆく。これがこの道の基本的なパターンである。この中を生きる人はそれ以外のパターンがあるということを考えることさえできない。それが人生のすべてだと思う。

「出世間道」は、その道によつて生死(三界)を出ることができ、その歩みを究竟すれば涅槃に至る。仏の教えが指し示しているのはそのような道である。しかし、自己意識は「涅槃」という言葉をとらえることができない。「涅槃」は意識を生みだした存在の大地でありながら、意識にとつては未知なるものである。波は海から生まれ、海とともにあるが、海自体を知らない。人は知らないものを求めることはない。しかし、どの人も内心深く、それを求める願いを宿して生きている。人生におけるさまざま苦しみはその願いを意識の上に顕現させる機縁となる。

「涅槃を求めて歩め」と外より勧める人を善知識という。

### 仏の教えが与えてくれる利益

利益とは「仏の教えに従うことによつて幸福・恩恵が得られること」と辞書にある。ではその恩恵、幸福とはどのようなものか。

まずは「あるがままの現実に帰ることができる」ということ。

「あるがままの現実を受け取れない」ということが人間の「苦」を形成する。「あるがままの現実」とは、一つは「あるがままの自己」であり、一つは「あるがままの人生」である。「あるがままの自己」とは「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいをもなすわれ」であ

る。「あるがままの人生」とは業縁のままに流転してきた過去であり、業縁のままに刻々とあらわれてくる宿業展開の現在である。

自分の思うようになることが人間の幸福なのではなく、「思うようにしたい」という「思い」から解き放たれることが人間の救いである。「思い」から出たとき、あるがままの現実を自体とする大きな世界を知る。その世界を本願海という。

「あるがままの現実に帰る」ことは決して「あきらめること」ではない。それは現実に随順し、現実と真向きに取り組む姿勢を生む。「これが私が生きるべき人生」となると、そこに深さをもった人生を生きる人が生まれる。

もう一つの利益は「必ず滅度(涅槃)」に至るといふ恩恵。

自己意識があれほど恐れた肉体の死は、我の消滅ではなく不滅なる世界への還帰である。不滅なる世界を涅槃といい、寂滅といい、法身といい、その名は無数にあるであろうが、体は一つである。一なる世界は言語を超えて、ありとしてある世界である。

私が若いころ、お年よりが「若いころは形のあるものがたのもしかつたが、この歳になると形のないものがたのもしくなる」と言われていたのを思いだすこの頃である。

### 二つの仏道

仏道に二種ある。

- 一つは私が仏を証明する道であり、
- 一つは仏が私を証明する道である。

(1) 私が仏を証明する道

この「仏」とは歴史上の釈尊であり、釈尊は菩提樹の下で正覺を成じ(自利)、それ以後、苦惱する人びとの為に教えを説かれた(利他)。この自利利他の釈尊を理想として歩む道である。この道は後に自力聖道門の歩みと呼ばれる。

その具体的な歩みは六波羅蜜の行として整理されている。

持戒、忍辱、精進、禪定、智慧(自利)、布施(利他)

初期仏教は智慧を得ることを目標として出家の歩みを勧めた。しかし、やがて自利のみを求める仏道を小乗と呼び、利他の大施を掲げる大乘の仏道が生まれた。

(2) 仏が私を証明する道

この「仏」とは阿弥陀仏であり、法身を体とし、光壽二無量としてはたらく力(本願力)であり、それは名号となつて具体化し、諸仏の讃嘆となり、歴史をつらぬいて現在している。この仏は私を煩惱具足(愚者悪人)と証明し、その証明において仏自身を私の上に全的に証明する。一切は仏の回向に依る。他力である。これが浄土の仏道である。

聖道門と浄土門という二つの仏道があるのではない、聖道の仏道歩みの果てに開かれるのが浄土の門である。しかし「果て」といつても、同一線上を延長したその先、という意味ではない。それまでの自己の立場が翻され、帰するところに見出される世界、そこが易行の一門である。その意味では浄土の仏道の中に一切の聖道の仏道は含まれるとも言えるのである。

幸いに有縁の知識に依らずば

知識

ここにある「知識」とは、仏教語の「善知識」の略で、「善き友、真の友人、仏教の正しい道理を教え、利益を与えて導いてくれる人」(『岩波仏教辞典』)をいう。

善知識

「善知識」とは決してこの三界と呼ばれる世界(世間)について多くの知識をもっている人を言うのではない。「善知識」とは、究極的な菩提という世界に立つて、その世界の意義を讃え、その世界に到る方法を教え、友となり、その世界に到る歩みを守つてくださる人である。かつては「一文不知の尼入道となりとも、後世を知るを智者とす」と言った。「後世」を涅槃界という。

親鸞聖人は『愚禿抄』に「善知識とは悪知識に対するなり」と書かれ、悪知識とは「仮善知識、偽善知識、邪善知識、虚善知識」であり、この流転する世間の歩みに止まらせる人である。

有縁の知識に依る

「出会いには偶然であるが、また必然でもある」との言葉がある。私という意識から見れば善知識との出会いは偶然ではあるが、大きな世界から見れば、永劫の時をかけて私に呼びかけ続け、今、時を得て出会いが成就したともいえるのだろう。その呼びかけを阿弥陀仏の

本願という。「不取正覚」の誓いの中でどの人にとつても出会いは必然なのである。

「人生の途上にはさまざまの邂逅がある。この世に生まれて、ある師に出会い、ある友と交わりを結ぶことを、私は天の恩寵とも思ひ、人生の至福とも考えているが、実に不思議の感に堪えない。なぜ出会ったのであろう・・・それは強いて求めて得られるものでもなく、求めずして得られるものでもない。迷妄や絶望のうちに期せずして彼方より訪れてくるものの如くである。ないしは、己が体内に深く眠っていた祖先の願の覚醒を伴いつつ、そこにおのずからなる抱擁のなるようにも感ぜられる。」(亀井勝一郎『親鸞』)

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」と親鸞聖人は嘆ぜられる。

### 三種善知識

#### ○師主善知識

私の師となり、教え導いてくださる方を言う。

私は二十代の初めに細川巖先生にお会いすることを得た。その出遇いはたまたまであった。大学の校内で開催されていた仏教の講演会に顔をだしたところ、そこに先生がおられた。先生はタマゴ、ドングリ、ヤシの実などのいろいろなたとえを示して、「人間は殻から

出て大きな世界を生きるようになることが大切」とくりかえし教えてくださった。

#### ○同行善知識

浄土の教えは「われら」の世界を開くという。差別の世界には「われら」の世界はない。「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいをもなす、われ」その身の自覚において、そのままに呼ばれてゆく所に生まれる連帯感が「われら」であろうか。

私は友がつかれない性格だった。友がつかれない性格とは、逆にいえば他者の友となれない性格ということである。先生は「友は自分でつくるものではない。友は仏さまから与えられるもの。友は求道のごほうびとして仏さまから必ず与えられる。」とも言ってくれた。しかし、今日に至るまで私が友を持つことが少ないのは、私の求道が不徹底であるからであろう。

真の友とは千人のうち九九九人が見捨てても、最後まで側に立ってくれる人である、と若き日に先生と共に読んだアンドレモローアの本の中に書かれてあった。思えば先生は私の真の友であってくれた方であった。

#### ○外護善知識

私が仏の教えを求めるため、いろいろな側面より勧め、護り、支えてくださった方を言う。ふり返れば、私は多くの方々のお支えの中で今日まで仏の教えを聞くことができたことを思う。仏教との最初の縁をつくってくれたのは私の母であった。この「歎異抄の会」でお会いすることができた多くの方の御恩を思う。

## 易行の一門に入る

### 五重の義

「一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号。この五重の義、成就せずは往生はかなふべからずとみえたり。されば善知識といふは、阿弥陀仏に帰命せよといへるつかひなり。宿善開発して善知識にあはずは往生はかなふべからざるなり。しかれども帰するところの弥陀をすて、ただ善知識ばかりを本とすべきこと、おほきなるあやまりなりとこころうべきものなり。」

宿善開発して善知識に遇う。そこから聞法の歩みが始まる。聞法とは「聞光力」という言葉もあるように、教えを聞くことをとおして光に触れる。浄土の教えは光となつて私の心の闇を照らす。

私の目は私自身を見ることはできない。「経」とは「鏡」である。鏡に映してはじめて自身の姿が知られるように、教えという鏡に照らされて自身の闇が知れる。闇を無明という。

何故浄土の教えが光としてはたらくのだろうか。それは浄土が法蔵菩薩の願心によつて荘嚴された世界だからである。その世界は清浄な功德によつてできている。

「時にかの比丘、…この弘誓を発し、この願を建て已りて、一向専志に妙土を莊嚴す。修するところの仏国、恢廓広大にして、超勝独妙なり。建立常念にして、衰なく変なし。不可思議の兆載永劫に

において、菩薩の無量の徳行を積植して、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲望・瞋想・害想を起さず・・・」

浄土の光の体をまた「尽十方無碍光如来」という。空間的にも時間的にも十方衆生を尽して照らす光である。照らし出すことにおいて無碍であると同時に、照らし出された闇に対しても無碍である。この光は照らし出されたどのような深い闇もさまたげとすることなく摂取して自体とする。この光は「念仏衆生摂取不捨」の誓いとともにある。その時、闇が闇のまま光となつて輝く。それを信という。

しかし、それは単なる「経」の中に説かれた説話ではないのだろうか。たしかに「法蔵菩薩」も「浄土」も「阿弥陀仏」も経の中に説かれたお話ではある。だが、十七願海、時空の中にあらわれた無数の諸仏が身をもつて讃嘆されている南無阿弥陀仏はお話ではない。否、み難い事実である。

では、なぜ単なるお話が事実を生むのだろうか。それは浄土の体が至心であるからである。

聖道の諸教はさまざまな仏教文化を生みだしてきた。

浄土の教えは苦悩する衆生を救い、人を生み出してきた。

「不可思議の弥陀の弘誓大船のなかりせば

五濁の海に沈みぞはてん」

(住岡夜晃)

## 仏教との出会い

仁科 晴

私が初めて寺岡先生の歎異抄の勉強会に出席したのは平成二十一年の四月ですからもう十三年になります。私はなんでも結論を出すのが早く飽きっぽい性格ですので本当にこれまでよく続けているなと思います。仏教というのは人間にとって避けて通れない問題を含んでいるからでしょう。

私と仏教との出会いについて書いてみます。

小学校三年か四年の頃、私は死ということが無性に恐ろしかった。なにがきつかけだったのか覚えていませんが昼間は忘れていても夜になると死ということが気になります。そのころ豊臣秀吉とか織田信長の伝記を読んでこの人たちは天下をとったすごい人なのに今はもう死んでいない。死んで何処に行ったのか、今どこで何をしているのだろうかと思いだしたらなかなか寝付けません。

あるとき思い切つて父に「お父さん人間は死んだらどうなるの？」と尋ねたことがあります。すると父は「死んだら体はなくなるが魂は生きている」と教えてくれました。魂は生きていると言われても魂とはどんなものかわかりません。しかしその時はそれ以上父に聞くことはしませんでした。そのころ死ということを考えたり人に聞くのが恥ずかしかつたからです。その後小学校五年の時、祖父がなくなりました。葬式が営まれましたが葬式の中心はお寺の和尚さんです。その時、死というものはお寺の和尚さんに聞いたら教えてく

れるのだろうかと思いました。しかし中学、高校と進むうちに勉強などが忙しくなり次第に死の事は忘れていきました。

大学に入ったころ、たまたま知人の家に「在家仏教」という月刊誌があり、高名な宗教家が講演されたものが毎月掲載されており、それを読んだり、その講演会を聞きに行ったりしておりました。また大学に座禅のクラブがあつたので座禅会に参加したりして多少仏縁が出来ました。しかし大学を出て就職し結婚したりしているうちに仏教との縁も又なくなつていきました。

会社の定年も過ぎ、退職金ももらつて、あと少し会社に残れるという時、私はそれまで経験したことが無いような窮地に立たされた。金銭的のトラブルに巻き込まれて無一文になつてしまったのです。詳しいことは書きませんが仕事も全く手につかず、外出することすらも出来ずに、家に引きこもっているような状態が続きました。まだこれから二十年、三十年と生きていかなければならないのに、こんなことではだめだ、何とかしなければと思えば思うほど蟻地獄に陥つていきました。

そうしている時、思いついたのが昔読んだ親鸞聖人の事でした。念仏すれば救われるという易行道の宗教です。多少経験があつた難行道と言われる禅をしてみようとは思えません。そして本屋に行つては真宗の本を探し、新聞で真宗の講演会を調べては遠くであつても聞きに行きました。しかし在家仏教誌で立派な方のお話を聞いたり読んだりしていた私にとっては「この方にもっと聞きたい」と思えるような方には出会えませんでした。



そうしている時、寺岡先生の「歎異抄の会」を知り、今まで聞いたことのない新鮮な内容のお話に感激し、とても嬉しかったことを覚えています。それまでどこか良い先生はいないか、良い勉強会はないか探していましたが、もうその必要がなくなりました。その時のお話は「世間道と出世間道」というもので「人生は変えることは出来ないけれども見直すことは出来る。人生はやり直すことは出来ないけれども過去の解釈を変えることは出来る」というものでした。

過去の失敗でどん底に落ちていた私が本当に聞きたかったお話をしてくださいまして閉ざされていた私の心が開かれていくのを感じました。

新しい場所で

山田光子

先日はありがとうございました。新しい場所で始めての方々もおられ、どんな思い、考えをもつていらつしやるのか少し楽しみな気もします。今回、先生はおわり頃に、わからないことはそのまま身にとどめておけばよいとおっしゃいました。それで、これまでスッキリしないこともあったのですが、続けて学んでいけばいいんだと思えました。亀のようにノロノロと、又、立ち止まりながら歎異抄に親しんで生きたいと思えます。

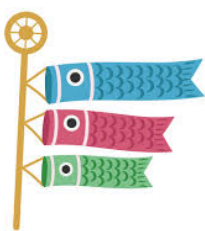
子離れ

寺岡一途

明け方、夢を見て目が覚めた。まだ五時前だった。普通ならまたそのまま眠るのだが、その時は夢の内容が気になり、起きあがり書きとめてみた。

『運動会のレースで重い荷物をいくつも運ぶことになった子どものために、運ぶ助けになる道具が何かないと体育倉庫に行つて捜している時、そこにいた人が、昔自分が使っていた古いスキートの板があるからこれを使いなさいと貸してくれた。でも、板だけでは荷物が載せれない。確か、前の年のレースでは荷物を載せるための大きな籠がたくさんあったような記憶があり、それを探す。しかし、どうしても見つからない。ぜんぶ捨ててしまったのだろうかと不安になったが、それでも探していると倉庫の隅の棚の上の一つ残っていた。その籠と板を持つてスタート地点にもどり、待っていた子どもにも渡す。他の子どもたちが出発すると、この子どもも板と籠でソリを作り、それにたくさんの荷物を載せて同じ、大地の上をしつかりと歩いていった。』

夢なので、あちこちつじつまの合わないところがたくさんあったが、書きとめていくうちに



夢となってこの朝、私の中に現れてきたものの姿がだんだんと見え  
てきた。

この連休に都会に住む長男が家族四人で帰ってきた。長男は十八  
の時、都会の大学に進学し、家を出て、結婚を機に一時、家に帰って  
いた時もあったが、仕事のために再び都会にもどり、それからずつ  
と都会に住んでいる。もう生まれてからわが家で過ごした年月よ  
り、家を離れ都会で過ごした私が知らない時間の方が多くなってい  
る。

結婚し、自分で家も購入し、その間に産まれた二人の子どもはも  
う三才と四才になる。二人の孫は、それぞれ個性的で面白い。長男  
がちょうどこの児たちの歳の頃、一緒に歩いた村の道を孫たちと一  
緒に歩いていると、昔のいろんなことが思いだされる。

二日目の夕は、近くに嫁いだ妹が夫婦でやっている小料理屋に食  
事に行った。妹にもおなじ年ごろの児がいて、三人は仲良くあそび、  
私たちは娘婿のつくってくれた料理をたべながら、夜おそくまで楽  
しい時間を過ごした。

会話の中で「この先、田舎の家はどうするかな・・・」と遠回しに  
たずねると、長男から「弟に帰ってもらったら・・・」とのことばが  
返ってきた。その声には私をいたわるようなやさしいひびきがそえ  
られてあった。

二泊して、連休明けの渋滞をさけ、長男の家族はまた車であわた  
だしく大都会に帰っていった。帰る前、長男は二人の子どもを家  
のお仏壇の前につれてゆき、祖母と祖父の写真の前で手をあわせてい

た。長男はこの祖母と祖父にかわいがられて育った子だった。も  
し、祖母と祖父がこれらの子どもたちの姿をみたらどんなに喜んだ  
ことだろう。

私が夢を見たのは長男たちが帰った、その次の日の明け方であつ  
た。長男はもうずっと前に親離れをしていたのだ。子離れができて  
いなかったのは私の方だったのだ。妻にそのことを話すと、そんな  
ことわかっていなかったの、とあきれられた。

#### 【後記】

○今日、田を耕しました。六月に入れば代かきをし、田植えをしま  
す。退職後は、米づくりが一年のスケジュールの柱になっていま  
す。

○この前の会には九十才を過ぎた私のいとこの井上さんが聞きに  
きてくださいました。仏縁で結ばれるつながりの尊さをたいへん  
うれしく思いました。

○二回目の会には五名の方が来てくださいました。やはり、月に  
二回というのは世間を生きる人にとつてはきびしいのかなと思ひ  
ますが、しばらく、このペースでやってみようと思います。

次回は五月二十五日（水）です。

来月は六月八日（水）、二十二日（水）です。